ALPS SOCIAL LIFE

>>> 社会

私が定年退職後に不登校の中学生メインの夜間中学をつくったわけ

日本初、不登校の中学生をメインとした「夜間中学」

私が北海道オホーツクの地にある北見市で「北見夜間中学」を立ち上げて3年目となります。不登校の中学生に学んでもらうことをメインにしていますが、それは「夜間中学」と名前のつくところでは日本初の試みだと思います。2023年度には不登校の中学生9名が、北見夜間中学に通いながら高等学校へ進学していきました。

私は全日制の道立高等学校の教師を60歳で退職し、その後、NHK学園高等学校という通信制の高等学校で講師をしていました。3年前の秋、東北のある県から転入学してきた17歳の女子生徒と個人面談した時のことです。彼女は「先生、私、高校にいた時、体育の時間に制服を二度も隠されたんです。制服が見つからず、悔しいからジャージで登校したけど続きませんでした」と話しながら、大きな涙をバチーンと床の上に一滴落としました。いじめが原因で、彼女は母親と妹、弟と別れて、父親が単身赴任する北見市へ一人でやって来たのでした。話を聞くこと50分。私は「よくそこまで話してくれたね。大変だったね」と言うのが精一杯でした。彼女の言葉と流した涙に心が激しく動きました。

その言葉を何度も何度も心の中で反芻しながら数カ月たった頃、私の中に「高校生は学校を辞めても通信制高校へ通うという方法が残っているが、不登校になった中学生にはどんな選択肢があるんだ？」という疑問が浮かびました。そのことに気づくや否や、私は「夜間中学」を立ち上げるべく、スタッフ集めに一軒一軒訪ね歩き、あちこちに電話をかけ、手紙を書き、支援をお願いして走り回っていました。

私は、私利私欲で動く大人たち、自分の出世のために動く大人たちをたくさん見てきました。子どもたちはそういう大人社会の影響を受けます。不登校の生徒が生まれる背景には、私たち大人の責任があります。私は、話をしてくれた生徒ともう1名の生徒と妻も加えた4名で「夜間中学立ち上げの原案づくり」を始めたのです。その生徒との出会いがなければ、今の「北見夜間中学」はなかったでしょう。

「北見夜間中学」の概要

- 参加者の延べ人数
  生徒・中学生　1年目…162名 → 2年目…239名
  生徒・シニア　1年目…170名 → 2年目…259名
  講師・スタッフ1年目…378名 → 2年目…419名
  講師・スタッフは小学・中学・高等学校・大学教員の退職者が8割で、その他、国立北見工業大学生7名、英会話教室の先生、元受験塾の講師等で約40名。
- 授業内容
  一斉指導及びマンツーマン指導を組み合わせ、且つ中学生とシニアの方（20代～80代）のクラス別指導あるいは混合で教科毎に分けている。国語、数学、英語をメインに社会、理科の5科目と音楽、美術、体育、家庭科もある。
- 実施時間
  中学生＋シニア
  毎週金曜日16:00～18:00
  中学生限定の数学講習
  毎週火曜日16:00～17:30
- 実施場所　北見市の総合福祉会館
- 特別授業のテーマ
  「北見北斗高校吹奏楽部によるミニコンサート」
  「大学を休学し、世界38ヶ国を見てきた女子学生の一人旅」
  「生成AIとの上手なつき合い方」　等

北見夜間中学 代表
斉藤 満幸

[さいとう・みつゆき]1956年北海道滝上町生まれ。北海道教育大学大学院社会科教育科卒業後、小・中学校の教師として20年以上、高等学校の社会科教師として12年勤めた他、東京農業大学の非常勤講師を5年、通信制高校の講師を8年務める。現在は社会福祉専門学校で講師を務めている。

北見夜間中学で役員を務めるスタッフ

中学生とシニア合同の授業の様子

全国で増え続ける不登校の小・中学生

学校へ行かなくとも、立派に成人し仕事に就いて活躍している人は確かにいます。しかし、北見市のような人口11万人の地方の町でさえ、不登校の小・中学生（30日以上の欠席が続いた生徒）が2023年度に約300名いました（北見市教育委員会発表）。全国には約30万人いるとされ、10年前から急激に増加しています。このうち小学生が約10万人で10年前の5倍、中学生が約19万人で2倍に増えています（2023年、文部科学省発表）。

その子たちが小・中学校生という多感で心身共に著しく成長する時期を過ごすのに、学校に代わる場所や機会があるでしょうか？　家で引きこもる子の多くはスマホを1日中いじっているのが、北見市での実態です。公教育は崩壊の危機にあるのです。

学校には、朝起きられない子（起立性調節障害）、集団の中に入るのが怖い子、音（声）に敏感に反応する子、親の虐待に遭っている子など様々な子どもたちが通ってきます。以前に比べると学校は細かに対応していますが、不登校等問題を抱えた子への対応については、まだまだ充分ではありません。

学校のあるべき姿は「子どもたちが行きたくなるような場所」に尽きます。不登校の子の多くは今の学校は面白くないのです。「集団で、一斉に授業を受けることに、息苦しさを感じる」という声をよく聞きます。学校生活の9割近くの時間は授業を受けているのに、その授業が「知的で、楽しく、分かりやすい」内容になっていないのではないでしょうか。

「北見夜間中学」を運営する上での葛藤

「北見夜間中学」の運営上の最大の葛藤は、各講師の「授業の質」にあります。

小学校は別にして、中学・高等学校の多くの教師は、他の教師に授業を見てもらい、その後に本音で反省し合う「研究授業」を現役40年の中でほとんど経験せずに退職します。

他の教師が見ている前で公開授業をすることは緊張を強いられますし、かなりの準備をして臨まなければなりません。北見夜間中学では公開授業を行っていますが、当初、「知的で分かりやすい」になっていない方が想像以上に多いことに驚きました。そこで厳しいコメントをすると、授業を行った講師のプライドが傷つくのか、去っていく人が1年目は数名いました。

3年目の現在は、数学の個人指導を中心にした授業が定着しているせいか、公開授業で問題点を感じても、お互い、公の場ではコメントしないようにしています。講師は定年退職した元教師がほとんどですが、その「授業の質」が運営上の最大の葛藤となっています。つまらない授業だとせっかくやって来た生徒が次は来なくなるかもしれないのです。これほどのストレスはありません。

やりがいは生徒たちの満足した顔や笑顔

家に引きこもっていた生徒が、北見夜間中学へやって来ます。とりわけ中学3年生になると高校受験が気になり、足を運ぶことが多いようです。生徒を見ていて週1回の授業では足りないと感じ、2023年から中学生限定で数学講習を追加しました。当初は私一人で教えていましたが、今は大学生を含めて5名前後の講師が7～8名の生徒にほぼマンツーマンで指導しています。

私は社会科教諭で数学は専門外ですから、数学講習には必ず生徒全員分の授業の予習をして臨みます。運営という立場から一歩引いて数学の個別指導を始めると、中学生の〝生の心の声〟が聞こえてきます。勉強に全く関係ない話で笑ったり盛り上がったり、解けなかった数学の問題が解けて満足した生徒の顔を見ていると、ホッとします。ここにやりがいを感じます。卒業後、「先生たちに会いたい」と遊びに来たり、進学した高校での様子を報告に来る生徒もいます。

生徒以外にも、多くの方々から励ましの言葉やご支援をいただきました。カンパという形で数十万円の寄付も珍しくありません。民間企業の方、匿名の方、知人、友人、親族などからのご支援もありました。たくさんの出会いがあり、多くの方やスタッフに支えられながら、「北見夜間中学」は、もう少しで3年目を終わろうとしています。